

## あの夏の思い出

「週末寸言」原稿 20080726

『方丈記』の一節に「又養和のころとか」で始まる一文がある。養和という年号は1181年からたった2年間しか続かなかつた。理由は、源平の争乱と空前絶後の飢饉に見舞われたためだ。

「国々の民、或は地を棄てて境を出で、或は家を忘れて山にすむ。さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれど、更に其しるしなし」というわけで、通り一遍ではないさまざまな行法をやってみるが、飢饉も戦乱も一向におさまらず、中には家を捨てて山中に逃げ惑う人まで出る始末だった。

こうなると食糧を生産していない都市住民は大変だ。飢饉の経済下では「金Ⅱソフトウエア」は軽視され、「粟Ⅱハードウエア」が尊重される。飢えに苦しむ京の都には誰も入ってこない。都人は飢えに飢えた。そのため持てる財物を片っ端から売りに出すのだが、そんなものは腹の足しにはならないので見向きもされない。かくて「乞食、路の

ほとりに多く、うれへ悲しむ声耳に満てり」という有様であった。

ここに「京のならひ、なにわざにつけてもみなもとは田舎をこそ頼めるに」という一節が入っている。ここを読むたびに、筆者には63年前のあの暑い夏の記憶がよみがえってくる。

昭和20年敗戦前後のこと、鄙では減多に会えない美しい婦人達が都会からおおぜいやってきた。農家に隠匿してある米、麦、大豆などを哀願して買っていく。現金ではなく、当時減多にお目にかかれない美しい着物と物々交換していくのである。

分の悪い交換条件でようやく手に入れた食糧のうち、米は特に念入りに扱われる。大蛇のような長細い袋にこれを詰め、腹に巻きつけて妊婦を装うのである。その舞台裏のなまめかしい更衣の現場を子供ゆえに咎められることも無く凝視していたものだ。統制経済下の食糧管理は苛烈さをきわめ、無慈悲にも列車の中で「嬰兒」を没収されることもしばしばだったという。今、この国の食料自給率は39%。あの飢餓時代の記憶がしきりに脳裏を駆け巡る。